



地域で

子どもたちを 育もう！



任せる気持ちで子どもを育てる

一月が丘小学校遊びの学校（岩手県）

本誌2008年4月号で紹介

もらしい独自の発想。

介した盛岡市立月が丘小学校遊びの学校。その後も取り組みを継続し、子どもたちの成長が見えてきたようだ。今回は子どもたちの成長ぶりを紹介する。（取材・文／谷藤 康浩）

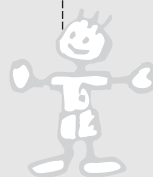


08年度の遊びの学校は計5回。今も私たちの五感をくすぐる快い余韻がある。宿泊テントが並び野外炊事の煙が立ち上る夏の校庭、積雪で白くなった校庭、普段は先生から疾走厳禁と言われている廊下を思いっきり走る子どもたち、明かりがない暗い校舎でお化けへの恐怖と期待に絶叫する子どもたち、おやじたち扮する鬼に追われ逃げ惑いながらも隠された宝物を校舎内から見つけるのに夢中になる子どもたち、子どもたちと親で一緒に作った豚汁。授業とは違った自由な雰囲気、子ども

ちの遊びを楽しむことに対する貪欲さと熱意のなせるわざか。遊びの学校は、遊びの企画を練る子ども会議と遊びの企画を実現するためのイベントから成り立っている。もちろん、そこには先生や親たちか



第1回遊びの学校親子キャンプでは、みんなで協力して夕食を作った





雪の校庭で障害物レースを行う。
自分たちで考えた遊びだからこそ、楽しさも倍増する



らの強制は一切ない。子どもたちの自由な意思が何よりも尊重される。おやじの会のメンバーは全面などに助言、脇役的立場で関わってきた。

子ども会議は毎回、全校から参加児童を募った。子ども会議のメンバーは毎回少しずつ変わり、10人程度だが、多いときは1年生から6年生まで30人くらいの児童が放課後に残って参加した。まず、

子ども会議では遊びの学校で行いたい「遊びのメニュー」を決め、「遊びのルール」「役割」などを話し合った。会議が盛り上がり2時間を超える長い会議になることもあった。他人の意見を批判しないで尊重する、自分たちが遊びを楽しむためにアイデアを出し合うということ。会議が進められた。会議の司会進行や記録は、最初こそおやじの会のメンバーが手伝ったが、回を重ねるにつれ、子どもたち

で自主的に行われるようになった。子ども会議は遊びではないが、自分たちの手で遊びをつくっていくという過程の中で積極性が生まれ、自助の心が伸びてきている。楽しむための会議の重要性を理解し始めた証しである。

遊びの学校当日は、子ども会議で描いた遊びを実践する場。当日は思いも寄らないハプニングもあった。外での遊びは天候次第で、第4回は願いが叶い数日前に雪が降り冬の運動会ができた。

1年生から6年生までの児童が一斉に遊びを共有するのだが、普段は接点のない子どもたちが、遊びでは「鬼が来た!」「ここで座っているとゲームにならないよ」などと声を掛け合っていた。これこそ、自然と遊びの中から共助の心が生まれた瞬間なのだ。

大人が子どもを見守り、尊重して冒険させていくことで、子どもたちは自分の持つ力を十分に発揮して、自ら育っていくことができる。そのような活動を継続していく中で、子どもたちの主体性が育っていると強く感じた。

